

富山在住者・出身者限定の一般公募で選ばれたキャスト、美術スタッフとともに《オール富山》という座組で、芝居をつくる。

「マスター」には、実生活でも珈琲焙煎店を営むマスターで本作品が初舞台となる六渡達郎。「若者」は、俳優として東京で活躍する善雄善雄が演じる。脚色演出は、富山市出身で元精神科医という異色のキャリアを持つタニノクロウ。

タニノクロウが主宰する庭劇団ペニノの代表作「ダークマスター」原作は1995年に狩撫麻礼が発表した短編漫画で、タニノは物語の舞台を富山に移し、脚本を新たに書き下ろした。劇中の会話には富山キャストのリアルな方言が飛び交う。

富山県のとある街。今は、錆びついたアーケード商店街の細い路地を入ったところに物語が始まる定食屋が現れる。

物語は、1人の男が酔いつぶれるシーンから始まる。テレビでは、周辺の再開発ニュースが、流れている。

そこへ、東京から一人の若者がやってくる。マスターと呼ばれる男は、若者に自分の代わりにここの料理人になれと言い、料理経験の少ない若者にイヤホン型の小型無線機を渡す。自分は二階に隠れ、イヤホンから若者に料理の手順を伝える。やがて、定食屋は有名な行列店になる。

「ダークマスター」の世界観は、まさに不思議だった。

始まりは、男が酔いつぶれているシーン。よく見かける何の変哲もないありふれた光景に見えるが、不思議と引きつけられるのは、テレビから流れるローカルニュースによるものかもしれない。

複合施設ができるという実際にはないニュースだが、リアリティのある映像と作りこまれた舞台芸術から、不思議と本当のニュースに感じる。存在しない定食屋なのに、そこにあるような懐かしい感覚。

この感覚は、物語が進むごとに加速する。

劇中、若者はイヤホンでマスターからの指令を受けながら調理を行う。

同じく、観客にもイヤホンが渡され、若者の疑似体験ができる。

また、調理シーンは、セットの厨房の中で実際に行う。目の前で火が立ち上がり、フライパンからは油がはじける音、そして、観客席には料理のにおいが漂う。マスターの指示で調理していく若者の姿やお客さんの「おいしい」という声が聞こえると、私までお腹がすいてくる。

物語が進むにつれ、「ダークマスター」というタイトルに違和感を感じた。

序盤で、机に伏す男の姿が、カタカナ語の「マスター」が似合わないというのもあったが、若者が初めて働いた後に、才能があると褒める姿や、1人前で働けるようになった若者に「ありがとう」と声をかけるマスターの姿には、ダークという言葉は似合わなかった。

若者とマスターの間に信頼関係が生まれ、温かみのある描写がある反面、匂わせてくる出来事が増える。

東京にいる彼女とのテレビ電話で、「顔が変わった？」と言われたことを皮切りに、若者とマスターが2人で1人になったかのように錯覚するといった不思議な出来事が増える。

東京から来た客を若者がキッチンに立たせるといったシーンでは、マスターと若者の出会いを彷彿させられた。

これからは客が、若者の代わりになるのではないのかといった含みのあるシーンでは、ドキドキが再骨頂に達する。

違和感のあったダークマスター(雇い主)という言葉がしっくりとしたのは、終盤のシーンであった。

お店の立ち退きを要求するヤクザに対して、マスターは「やってよし」と若者に指示する。

若者は、言葉通りヤクザに暴力を振る。

これがダークマスターなのかと腑に落ちた瞬間だった。

不思議でドキドキする

「ダークマスター」の独特な世界観は今もなお、胸の片隅に残っている。

Y. Y (富山県富山市)